

VI. キャリア形成を軸とした総合人間科の取り組み

第1章

本校におけるキャリア教育開発の経緯

佐 光 美 穂

【抄録】 平成12年度以降、本校では総合学習（総合人間科）をキャリア教育の中核と位置づけ取り組んできた。特に高校段階では、進路指導とリンクさせることで、一定の成果を挙げている。

【キーワード】 キャリア教育 自覚的なキャリア意識の育成 人や社会との関わり合い 進路指導

第1節 本校におけるキャリア教育開発の経緯

(1) キャリア教育と「総合人間科」

平成11（1999）年12月16日の中央教育審議会答申「今後の初等中等教育と高等教育の接続の改善について」において、以下に引用するキャリア教育の定義が示された。

キャリア教育＝望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や態度や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育

この答申を受け、本校は平成12（2000）年度より17（2006）年度にかけて、以下に掲げる研究主題のもとに、キャリア教育を研究開発の中心として取り組んできた。

「高大の連携」を活かした「青年期のキャリア形成」に資する教育課程の研究開発

—— 総合学習の発展を軸とした

併設型中高一貫カリキュラムの開発 ——

本校のキャリア教育の特色は、いわゆる進路指導も行うが、その進路選択を下支えする力を養成しようとするところにある。つまり、自己の興味、関心、適性を探りながら、より自己に適した進路を模索する機会を生徒に与える。その中心的な場となるのが「総合人間科」である。

総合人間科は、本校における総合学習の名称である。平成7（1995）年から、全校的な取り組みが始まった。もともと総合人間科は「自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる」ことを目的として研究開発された教科である。実践も十年以上にわたって継続しているが、担当する教員にも、多くの生徒がこの授業での課題探求活動がきっかけになって、進路意識を深めている様子が感じられている。そのため、上掲平成12年度以降の研究開発では、総合人間科の取り組みを更に発展させ、本校の

キャリア教育の中核として位置づけられるに至った。

(2) SSHとキャリア教育

平成17（2006）年からスーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）の取り組みが始まった。6か年の教育課程の中で育成するものとしてサイエンス・リテラシー（科学的思考力）が新たに盛り込まれたが、それと並んで自覚的なキャリア意識の育成が柱として残された。

基本コンセプトは以下の通りである。

多くの人との出会いや多面的な学習から自分の興味・関心が何かを探りながら、大学との連携を活かした豊かな学習環境の中で自己の学習を跡づけ、将来の自分の生き方について、ともに学び合いながら自覚的に選び取る力（自覚的・自立的キャリア意識）を育成する

また、生徒に身につけさせたい力としては以下の5点に集約される。

1. 探求力
2. 共感力
3. 多面的な観察力
4. 人・社会・環境に対する適切な自己認識力
5. 人や社会への関係形成力、関係調整力

本校でのキャリア教育が狭義の進路指導だけのものでないことは先述した通りであるが、SSHの取り組みが始まって、基本的な理念に変化はない。また、総合人間科が中核を担うという教育課程の構造も変わっていない。本校のサイエンス・リテラシーは自然科学領域のみを対象とするものではなく、理系の進路を取る生徒を育成することだけが目的ではない。あくまでも生徒一人一人が、自分の関心と適性に応じて自分で進路を選び取っていく力をつけることが目的である。

一方、従前の取り組みに新たに加わったのが「人や社会との関わり合い」の部分である。協同的な学習活動の導入がこれまでより強く意識されることとなった。

第2節 総合人間科の位置づけ

(2)総合人間科の6か年の学習過程

(1)総合人間科の意義

総合人間科を併設型中高一貫教育課程における、キャリア意識形成の中心として、6年間の発達段階に応じた学習活動を展開する。

本校は併設型の中高一貫校で、6年を1-2-2-1という単位に分けて教育課程を組んでいる。教育課程と総合人間科の6か年の学習コースとの関係は次のようにまとめられる。

教育課程		総合人間科	
学 年	学習区分	学習テーマ	学習目標
中学1年	入門基礎期	生き方を探るⅠ	身近な人々との出会いから、生徒の興味関心の範囲を広める。その中から学習目標や学習方法を身につけ、6年間の基礎とする。
中学2年	個性探究期	生命と環境Ⅰ	生命や環境に関わって調べ学習していくことで、自分の興味関心を深める。
中学3年		平和と国際理解Ⅰ	広島への研究旅行の機会を生かし、国際社会や平和の問題に関心を広げつつ、中学での学習のまとめをする。
高校1年	専門基礎期	生命と環境Ⅱ	個人の問題意識を追究することを通し、自己の進路とのつながりを考え、高校3年間の学習への方向付けをする。
高校2年		平和と国際理解Ⅱ	沖縄への研究旅行の機会を生かし、歴史的・文化的視点と国際問題や人権問題などの現代的課題を探究する。
高校3年	個性伸長期	生き方を探るⅡ	社会的自立を意識して、高校生活を振り返りながら自己実現の目標を探る。

(3)学習形態と学習サイクル

①学習形態

各学年のテーマは固定されているが、その基での学習活動の展開は、各学年の裁量にゆだねられている。学年で設定した学習目標に照らして、個別学習、ペアやグループによる学習形態を取る。

中学3年と高校2年はグループ学習の形態を取るが、それ以外の学年は個別学習を基本としている。

②学習サイクル

これも具体的な展開は年度ごとに編成されるが、ほとんどの場合、フィールドワークを中心として学習活動を組む。フィールドワークを中心とする場合、以下のようなパターンになる。

研究テーマの設定→事前研究→フィールドワーク→研究のまとめ（発表会・集録作成）

(4)高校進路指導との関係

高校1年での総合人間科は、キャリア教育の観点からは、「自己発見」のプロセスとなる。総合人間科でテーマを設定し、追究していく過程で、自分が何に興味があるのか、自分に向いているのは何かを問いかけることになるからである。高校1年でのテーマが進学先の学部・学科選択の背景となることが多く、上級の学校で学びたいという意欲を生んでいるようである。

一方、高校1年次には、実質的な文理選択を行うことになる。進路選択に直結する部分では進路指導部と学年が連携し、次のような活動を行っている。

- ・オープンキャンパス、看護体験・保育体験の情報提供（随時実施）
- ・進路適性検査（R-cap for teens）実施（7月）
- ・R-cap検査結果の解説（9月）
- ・進路志望調査（10月）

- ・進路についての個人面談 (11月)
- ・進路についての三者面談 (12月)

進路志望調査で、興味のある学部・学科に進学するにはどのような科目が必要なかを調べることになるが、受験科目として必要な教科が何かということに増して、大学の学問体系が高校教育とどのように接続または断絶しているのかを知るようになる。こうした作業を経て、生徒は来年度の科目選択を自分の力で行っていくことになる。

高校2年次では、テーマ柄、社会との関わりを意識することとなる。その中で、自分の進路についてもより具体的に考える時期に入る。次のようなプログラムを用意して、生徒を支援している。

- ・1日総合大学 (6月)
- ・進路講習会 (3月)
- ・進路志望調査 (6月、10月)
- ・進路についての個人面談 (11月)
- ・進路についての三者面談 (7月、12月)

比較的早い時期に実施される一日総合大学では、名古屋大学を初めとした周辺の大学から主要な学部の教員を招き、大学での学びを知る機会として提供している。また、学年末に行われる進路講習会では、専門学校への進学希望者を中心とした対象として、専門学校教員を講師として招き、職業や資格についてのガイダンスを行っている。

高校3年次では、3年間の学習のまとめとして、自己実現の道を模索する。総合人間科のテーマも「生き方を探る」であるため、狭義の進路指導と学習が直結する学年である。進路志望別にグループを結成し、その中で個人の探究活動を進めていく。他学年では秋に実施するフィールドワークを、高3では6月に実施し、研究室や職場を訪問することとなる。学習のまとめとして行う生き方についてのスピーチを秋に行い、グループ内、学年内で共有する。個人研究を担当教員が指導し、また類似の進路志望を持つ生徒と交流していく過程が、キャリア・カウンセリングの機能を果たしているとも言える。

進路指導部、学年団の連携で行う活動は以下の通りである。

- ・進路LT (随時)
- ・外部講師との交流会 (6月)
- ・進路志望調査 (4月、6月、10月)
- ・進路についての個人面談 (随時)
- ・進路についての三者面談 (7月、12月)

第3節 成果と課題

(1)これまでの成果

総合人間科のキャリア教育上の効果は次のようにまとめられている。

- ①高1から一貫した追究テーマを持った生徒は、一貫性が低い生徒より最終的な進路への満足度が高い傾向がある。
- ②成績の上位・下位に関係なく適切な進路を選択し、概ね満足のかつ進路決定をしている。

このような傾向は、これ以降も担当者の印象の上で大きく変わっていないように思われる。本校の教育課程において、総合人間科がキャリア教育の根幹として機能している証と言えよう。その意味では今後、高1の段階で、どれだけ生徒のキャリアと結びつけるような指導ができるかが問われることとなる。

(2)今後の課題

ここでは総合人間科の学習活動を展開する上で残っている課題のうち、代表的なものを挙げておく。

①個への対応の充実

中学段階では生徒個人の発達の度合いに開きがあり、個別探究活動において、進行状況や探究の深さなど質的にも量的にも格差が大きい。また高1では、公立中学から入学する40名の生徒が初めて総合学習に取り組むため、手厚い支援が必要になる。いずれの場合にも、指導スタッフの数には限界があり、現状では十分な支援が行えていない。今後、仕組みとしてどのように整えていくのが問題である。

②学習計画、活動の見直し

総合人間科の生徒に対する効果は本校の教員にも認められ、現在に至っているが、以前からの内容の繰り返しとなり、マンネリ化しているとの批判もある。また、研究旅行とリンクする中3、高2での取り組みは、戦争体験者・被爆体験者の高齢化により、やがては抜本的な方向転換が必要になることが予想される。

フィールドワークの学習効果は高いものの、学習を進める上で、実際の困難を感じる場面も多い。例えば、複数の学年が同時期に集中するため、PC利用や図書室の利用など施設的な面で物理的な限界に達している。また同日に訪問するため、学年を超えて訪問希望を調整する必要があり、担当者の労力的な負担となっている。これらを解決するには、フィールドワーク中心の学習計画を改める、フィールドワークの時期を大きくずらすなどの方法が取り得るが、前年度踏襲で大きく見直すことがないため、なかなか変わることがない。学習計画や活動を今後、もっと柔軟に変えられるようしていく必要がある。

(文責：佐光 美穂)